

<様式>

学 校 名	山形市立桜田小学校 山形市桜田東1丁目1-30 Tel 624-5083 Fax 633-9794	校 長	阿部 勉
		研究主任	木下 浩太郎
研 究 主 題	自己の学びを創り上げていく子供の育成（四年次） ～個別最適な研究で「対話」を探る～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校の学校教育目標は、「未来をひらく、^{英知}と力のある子供の育成」である。「未来をひらく、英知と力」のある姿を下記のように考える。</p> <p>少子高齢化やグローバル化等によって社会構造がめまぐるしく変化する時代の中で、多様な価値観が混在する社会を自分らしく生きるために、諸問題を他者と協働しながら、柔軟な発想で解決していくことができる姿。</p> <p>学校教育目標を具現化していくために、学校生活の中で生じる課題を、自分事として捉えて、他者と協働して解決していくことや、互いを認め合いながら生活する経験を重ねていくことができるようにしていくことが重要である。</p> <p>これまでの研究を通して、次のようなことが見えてきた。</p> <ul style="list-style-type: none">・課題に対して意欲的に取り組むことはできる。活動から分かったことをもとに課題を設定したり、失敗したときにどのようにすれば上手くいくかを考えて学びを調整したりすることが課題である。・友達と関わりながら学習する習慣は付いてきた。友達と関わることで、学びを深めていくことが課題である。・それまでに経験したことや学んだことと、これから新しく学ぼうとしていることを関連づけて捉えようとする意識が弱い。 <p>これらの実態を受けて、社会の今日的な課題に対応するための資質・能力である、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」を授業を通して身に付けることができるように「自己の学びを創り上げていく子供の育成」を研究主題として設定した。研究主題に向かって実践を重ねることで、「主体的・対話的で深い学び」の具現化を目指す。本校が考える「自己の学びを創り上げていく子供」は以下のような子供と考える。</p> <ul style="list-style-type: none">●課題に対し、見通しをもって粘り強く取り組み、学びを振り返って次へつなげていく子供●友達と対話することで、学びを広げたり、深めたりする子供●知識を相互に関連付けて深く理解したり、必要に応じて知識・技能を発揮したりする子供 <p>子供がこれまで学んだことを新しく学ぼうとしていることと結びつけて考えたり、様々な場面において必要に応じて学んだことを引き出し、活用して考えたりすることができるように、学習場面や生活場面の中で教師が仕掛けていく。</p>		
こ れ ま	<p>(1)「対話を探る」に関すること</p> <p>一昨年度より、授業における「対話的な学び」に着目して研究を進めてきた。そして、これまでの研究で子供同士の対話における学びの性質には下記の3つの段階があることが分かり整理するとともに、「学びが深まる対話」を実現するために様々な手立てを講じてきた。</p>		

- ① 考えの芽が生まれる対話
→考えや思いをもてなかった子がもてるようになる。
- ② 学びが広がる対話
→考えや思いを共有することで学びが広がる。
- ③ 学びが深まる対話
→考えや思いが結びついたり、違う場面とつながったりするなど学びが深まる。

例えば生活科の中で...

C「ミニトマトを育てていたら、花がさいたよ！」
C「キュウリも同じように、花がさいたよ！」
C「トマトも花がさいたよ！」
C「しかも、どれも花がさいたところに実がなった！」
C「ちがう野菜も花がさいたところに行けるのかな？」
C「でもきゅうりはだけけるがのびていたよ」
C「野菜によってちがうこともあるんだね」

◎知識と知識がつながる。〈知識・技能型〉

例えば算数の中で...

C「この台形の面積はどう求めればいいんだ？」
C「台形を対角線で区切ることによって三角形が2つできたよ。」
C「三角形の面積なら求められるね。」
C「三角形の面積の求め方は台形の面積でも使えるんだ！」
C「じゃあ、台形以外の図形にも・・・」

◎知識と場面がつながる。
〈思考力・判断力・表現力型〉

(2)研究の運営に関すること

これまでの校内研究では、授業改善における手立てを職員全体で共有し、実践を積み重ねてきた。その際、校内研究として目指している子供の具体的な言動として現れる姿が明確に共有されていないことや授業で講じる手立ての視点を限定してしまったことから、子供の実態や発達段階に合わないことに取り組まなければならないことなどの課題が残った。このような問題が生じる原因として、子供の実態を加味せずに、目指す子供像を全体で一つに決めてしまったり、授業改善における手立ての視点を決めてしまったりしていることと考えた。

そこで、昨年度から一年を通して、研究していく教科と目指す子供像をそれぞれの担任が各学級の子供の実態から定め、それを実現していくための必要な手立てを講じ、研究仮説を立てるようにした。(研究の個別最適化)

それぞれ個人の研究を「①～のような手立てを講じると②子供の対話的な学びが変わる」という形式で仮説を立てた。

- (例)
- ・①導入場面で問題解決の見通しをもたせたり、ICTを活用して自分の考えを表出しやすい環境をつくったりすることで、②自分の考えをよく発信できる子供になるだろう。
 - ・①子供が自ら追究したくなるような課題を設定したり、子供の多様な思考が働くような発問の工夫をしたりすることで、②主体的に友達と対話しようとする子供になるだろう。
 - ・①思考力・判断力・表現力を育む学習の前に、活用できる知識・技能を確実に獲得できるように単元構成を工夫することで、②様々な考えを引き出し、学びを深めながら対話していく子供になるだろう。

一人ひとりの教師の課題意識をもとに、授業改善の具体的な手立てと、それらの手立てによる子供の変容を明確にすることで、教師にとっても子供にとっても価値のある研究の実現を目指してきた。

(3)学級経営に関すること

これまで「対話」をテーマに研究を進めてきたが、学習の土台となる「安心して学べる学級づくり」という点で下記の課題が挙げられてきた。

- ・誰とでも何でも話し合っで学んでほしいが、いつも同じ人が話をしている。
- ・反対意見を否定的に捉えてしまい、学びが広がらない。
- ・児童アンケートで「安心して発表できる」の項目に肯定的な回答をした割合が8割を下回ってしまう。
- ・友達の話を聞こうとしない人がいる。

これらのことから、安心して学べる学級の実現を目指し、以下の取り組みを行ってきた。

	<p>○さくらタイム（スピーチ的活動） 〈めあて〉 自発的、自立的に話し合える学級をつくる。 〈活動内容〉 スピーチ活動に取り組む（スピーチの形は、子供に付けたい力など学級の実態によって担任が決める）。</p> <p>1人 対 1人 （ペア） 1人 対 3・4人（グループ） 1人 対 全員 （クラス） など</p> <p>スピーチ内容を板書するなどして話しやすい環境をつくり、子供たちだけで運営できるように指導した。</p> <p>○CCT（クラスカルチャータイム） 〈めあて〉 お互いを認め合うあたたかい学級風土をつくる（相互理解） 〈活動内容〉 子供の実態に合わせて、構成的グループエンカウンターに取り組む。 例・自分と友達で違うところと同じところに気付ける活動。 ・学級全体で物語を作り、達成感を味わう活動。 など</p>
--	---

<p>今年度の研究</p>	<p>(1)「対話を探る」に関すること</p> <p>「対話的な学び」を3段階に整理して、子供の実態から、目指す学びの方法について授業者が決めて実践してきた。一年間の実践を通して、分からない子へ分かる子が教えに行ったり（「考えの芽が生まれる対話」）、考えを共有したり（「学びが広がる対話」）することはできるようになってきた。しかし、考えや思いが結びついたり、違う場面とつながったりする「学びが深まる対話」の実現には課題が残っている。</p> <p>また、「学びが深まる対話」の実現を目指していくことで、教え合いや考えの交流などを統合的に指導していけるということから、今年度より<u>全学級が、学びが深まる対話の実現に向けた実践を行うこと</u>とした。</p> <p>「学びが深まる対話」の実現に向けた具体的な手立ては、下記のようなことが考えられる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・対話によって思考力・判断力・表現力を育む学習を行う前に、活用できる知識・技能を確実に獲得できるようにする単元構成。 ・多様な考えが生まれる課題。 ・子供が対立したり、分化したりする発問。 ・対話する視点の明確化、共有。 ・それまでの経験や学習がつながっていることを自覚するための教師による問い返し。 ・対話することで学びが深まったことが自覚できるようにする振り返り。 など </div> <p>それぞれの教科、単元における「学びが深まる対話」の具体的な姿をイメージし、その実現に向けた手立てを開発していく必要がある。</p> <p>また、ここで扱う「対話」は、「子供と子供」または「教師を介した子供と子供」の言葉によるコミュニケーションを指す。</p> <p>(2)研究の運営に関すること</p> <p>昨年度より、研究教科、研究仮説をそれぞれの教師が選択・決定する方法で進め、教師の個性を生かした実践や、子供たちの実態に即した研究を進めることができた。一方で、以下のような課題も挙げられた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・教師個々人で選択・決定するとしても研究グループや学年等で検討し、方向性を合わせ、共有した方が授業研究会でも話しやすいと思う。 ・仮説を個々人に全て任せて選択・決定し実践を進めていくだけでなく、学年部や教科、グループでアドバイスできる機会があるとよい。 ・個々人の研究仮説、教科が違うことで研究の深まりを感じなかった。 </div> <p>そこで、研究の協働性を高めるために、研究仮説や研究教科を学年で合わせることとし、学年協働で研究を進めていくこととする。</p>
---------------	--

(3)学級経営に関すること
 さくらタイムと CCT を隔週で実施してきたが、以下のような課題が挙げられた。

<ul style="list-style-type: none"> ・隔週の実施ではめあてを達成できない。 ・お互いを認め合える学級づくりに課題が残る。

これらのことから、毎週取り組む活動を CCT に絞り実践していくこととする。

研究の方法

(1)研究授業

①研究教科
 学年における子供の実態や教師の授業に対する課題をもとに学年で教科を選択する。

②研究授業の進め方

- ・活動案は細案とし、研究仮説と単元や本時における手立ての関連を明確にする。
- ・学年やグループをもとに授業づくりを行い、授業を提案する。事後研究会では、研究仮説に沿った協議を行い、手立てが有効だったかを検証する。
- ・授業後一ヶ月以内に「事後研究だより」を発行し、全職員に配付し、成果と課題を共有する。

(2)CCT

- ・毎週木曜日の13時55分から14時10分までの15分間を学級のCCTの時間とする。
- ・子供たちの実態に応じて、年間で計画的に活動を設定していく。
- ・他の学年、他のクラスの活動を見合う機会を設定する。

(3)全体研修会

①ラウンドスタディ方式による研修会
 研究仮説に関する授業の現状の共有や、次の授業案についての相談などをトークテーマにして話し合う。(月一回程度の実施)

②学びCAFÉ
 普段の授業、学級経営に関することなどを主題に30分程度でグループを組んで話し合う。(月一回程度の実施)

③講師による研修会
 講師を招聘して授業づくりや改善、学級経営等に関する理論や実践についての研修会を行う。

(4)研究推進便り「TeamSakurada」の発行
 学級経営や授業作りの取り組みを全体で共有するために、研究推進便りを発行する。また、研究授業の「事後研究便り」も全体に発行する。

(5)研究のまとめ
 研究授業の事後研究便りをもとに作成する。研究のまとめは、具体的な子供の事実を抽出し、「対話を探る」に関する手立てが有効だったかを分析したもの(証拠となるもの)にする。

研究の計画

研究年次	主な研究内容
第1年次 (令和2年度)	【研究主題】 「自己の学びを創り上げていく子供」の育成 『必要感のある「関わり合う場の」設定』を研究の重点とし、実践を重ねた。
第2年次 (令和3年度)	【研究主題】 自己の学びを創り上げていく子供の育成 ～生き生きと対話できる子どもの姿を目指して～ 学習課題を追究するために、他者と対話させることを通して、友達の考えと自分の考えを比較したり、関連付けたりしながら話し合う力(生き生きと対話する力)を育成することに取り組んだ。

	<p>第3年次 (令和4年度)</p>	<p>【研究主題】 自己の学びを創り上げていく子供の育成 ～個別最適な研究で「対話」を探る～ 対話を用いた学びの性質を3つの段階に分け、「学びが深まる対話」の実現を目指した。 研究していく教科や目指す子供像をそれぞれの担任が決定し、研究仮説を立て、実践を重ねた(研究の個別最適化)。</p>	
	<p>第4年次 (令和5年度)</p>	<p>【研究主題】 自己の学びを創り上げていく子供の育成 ～個別最適な研究で「対話」を探る～ 対話を用いた学びの3つの段階を統合的に捉え、全学年、全学級が「学びが深まる対話」の実現を目指す。 研究の協働性を高めるために、それぞれの学年で研究教科、研究テーマを選択・決定し、実践を重ねていく。</p>	
<p>年 間 の 計 画</p>	<p>4月 研究全体会(研究の概要、組織等の提案) 校内研究の方針の決定、共有 提案授業の日程調整及び講師招聘 各学年、グループで単元計画、授業づくり</p> <p>5月 研究テーマに基づく授業実践(各学級1実践公開)</p> <p>6月</p> <p>7月</p> <p>8月 研究全体会(1学期の振り返り) 公開研究会に向けた単元計画、授業づくり 指導助言者を交えての検討会</p> <p>9月 案内状、研究紀要の作成 公開研究会当日を想定した授業研究、活動案作成 司会者、助言者との打ち合わせ</p> <p>10月 公開研究発表会</p> <p>11月 公開研究発表会を受けて授業実践</p> <p>12月 研究全体会(2学期の振り返り)</p> <p>1月 学年による今年度の研究実践のまとめ</p> <p>2月 研究全体会(委嘱研究4年間の研究の成果と課題、次年度に向けて)</p> <p>3月 次年度の研究の方向性 組織づくり</p>		